

【探偵ならば言葉を紡げ —オッドアイキャット連続消失事件—】

玉兎たもうさぎ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『探偵撲滅』の二次創作小説です。

被虐探偵と、オリジナルの探偵『言葉探偵』が出てきます。

時系列は、六號館殺人事件から約1か月。

被虐探偵が探偵同盟に加入して初めての仕事。

まだ被虐探偵という名前すらなく、探偵としてもずぶの素人。

そんな彼を、ヘラヘラと笑うつかみどころのない自称先輩、言葉探偵が巧みな言葉で支える。

ただの猫探し。

そう思っていた矢先、とんでもない事件に巻き込まれる――。

目次

第1話	探偵の始まり、変化の時。	1
第2話	探偵とは、解決へ。	5
第3話	被虐的であろうと、救いへ。	18

第1話 探偵の始まり、変化の時。

【1月21日 9時】

未だに慣れない朝の光と人混みに当てられ、ベンチに座っているのに息が上がって来る。

目まぐるしく動く背景に吐き気が押し寄せ、とっさに携帯に目を落とした。

そこには――

社畜探偵・『早速だが、キミの探偵としての初めての仕事だ。

21日、来週の日曜日に今成駅前に来てくれ。

不安かもしれないが、安心してほしい。

キミと年の近い先輩も呼んである。

仕事の詳細は彼から聞いてくれ。』

――もう何度も確認した、自分への初めての仕事の内容が書かれていた。

六號館殺人事件から1か月近く、社畜さんの協力で僕が探偵同盟の一員になる手続きに追われていたが、ついに来てしまった初めての仕事。

「ほんとうに僕にできるのかな…」

思わず出てきてしまった本音。

不幸を振りまく体質と、社畜さんが『名探偵体質』と呼んでくれた体質が表裏一体とは、僕には到底思えない

『キミのその境遇は、名探偵そのものだよ』

社畜さんから言われた言葉を思い出す。

そうだ、探偵を目指すと思ったのは僕自身なんだから、頑張らないと！

そう思い顔を上げると――

「考え事は終わったかい」

「ひいひい！」

自分の目の前に男がしゃがみ込んでいた。

男は驚いている僕を見てケラケラ笑う。

「そんなに驚かれると傷つくなあ。仮にもこれから一緒に仕事する仲間なのに。」

「え…」

そういうと男はショルダーバックから見覚えのあるモノを取り出した。

「あ…探偵デバイス…」

「俺も探偵同盟の一員だよ。不幸探偵」

そういつて探偵デバイスをしまい、僕の隣に腰掛ける。

俺も…？

「えっと、じゃああなが社畜さんが言っていた年の近い先輩さんですか？」

「そう、キミの一個上で元探偵だよ」

先輩というにはイメージとかけ離れていた。

探偵といえばスーツのようなピッチリとした服を着て、真面目なイメージだ。

少なくとも、社畜さんはそのイメージ通りだった。

でも目の前の先輩は、服はだぼだぼのパーカーで髪は寝癖でぼさぼさだし、さつきからずつとニタニタと笑っている。

「えっと…お名前は…？」

「かたいなあ、年も近いし敬語はやめてよ」

「そ、そうですね…あっ」

敬語をやめると言われた途端出てしまった敬語に、男はまたニタニタ笑った。

「まあいいや、俺は言葉探偵。呼びづらかったら言の葉って呼んでくれればいいよ」

「うん、わかったよ。言の葉くん」

言いなれないタメ口に言いづらさと共に、自分が変わろうとしていることに実感が湧き妙な嬉しさが込み上げてくる。

「よし。じゃあゆつくりお喋りと行きたいところだけど、残念ながら時間があんまりないから早速本題に入ろうか不幸探偵」

ショルダーバックからまた探偵デバイスを取り出す言の葉探偵

仕事の話になるからか、さっきの軽い口調から真面目な雰囲気になり替わっている。

でも、その前に気になることが…

「あの…さっきから不幸探偵って、僕のことですよね？」

「そうだよ。見ず知らずの人間にいきなり本名が知られているっていうのは気持ち悪いと思ってるね。」

あらかじめ社畜さんから聞いた情報からあだ名を考えておいたんだ」

「そうですか…」

不幸探偵か。

社畜さんが言の葉くんどんな情報を伝えたのかはわからないけど、僕を表すには確かに適切な言葉だと思う。

不幸な探偵、字面だけを見れば、こんな探偵なんか事件の解決は頼まないだろう。

「納得したなら今回の仕事内容を伝えるよ」

「は、はいー」

自嘲気味になっていたところに、仕事という言葉が耳に入り、一気に背筋が伸びてしまう。

「まあまあ、そんな難しい仕事ではないから硬くならないでいいよ」

言の葉さんの言葉を聞いても、僕の緊張は解けないままだった。



今回の仕事は迷い猫三匹の搜索。

探偵の定番ともいえる猫の搜索ではあるが、一度に三匹ともは聞いたこともない。

言の葉くんも「流石に三匹はやったことない」って愚痴をこぼしていた。

探偵同盟加入への最初の試練といったところだろうか。

「ただ社畜さんから貰った情報に少し違和感があるんだよなあ」

「違和感…っ？」

言の葉さんが探偵デバイスを眺めながら呟いた。

「三匹も猫が行方不明になって、こと自体は別にいい。ただどうして今成駅周辺の搜索としか書かれていないんだ」

「え、そうなんですか!？」

「そう、真面目な社畜さんには珍しくここだけ雑に書かれているんだ」
確かにそれはおかしい。

迷い猫といえ、飼い主の家の周辺当たりから搜索するのがセオリーだろう。

なのに猫三匹の写真はあれど、猫三匹の飼い主の情報が全く書かれていない。

確かに不自然だ。

「まあ社畜さんにも考えがあるんだろうから、とりあえず目ぼしい場所を片っ端から当たろうか」

「そういうものなんでしょうか…」

大体の目星はついているのか、言の葉くんは早速携帯で周辺のマップを見ながら立ち上がる。

「ああそうそう忘れてた」

「え…」

言の葉くんはゆっくりと振り返り、まだ座ったままの僕に手を差し伸べる

「これからよろしくね。不幸探偵」

日の光を背に手を差し伸べるその姿は、第一印象とは打って変わって頼りがいがあるもので――

「――よろしく。言の葉くん」

言の葉くんの手を掴み、ゆっくり立ち上がる。

立派な探偵になった自分の姿が、おぼろげながら浮かびあがり、久しぶりに目指すべきものが見えた気がした。

第2話 探偵とは、解決へ。

【1月 21日 14時】

「はぁ………」

何度目かわからないため息が、無人の公園の中に静かに鳴る。

搜索開始から5時間。

商店街の裏路地から公園、林の中や駐車場の隅まで駅周辺のめぼしい場所を探りはしたが、猫の1匹見つからなかった。

猫の好物も習性も、なんなら探偵として何を観察すればいいのかもわからない僕がいきなり猫探しなんて無理だったんじゃないだろうか。

今のところ僕の『名探偵体質』とやらも発現する様子もない。

そもそもこんな猫探しなんかで、僕の体質が活きるんだろうか。

それよりも猫が見つからない不幸に進んで、言の葉くんの評判を落としてしまうんじゃないか。

1度マイナスの方向に進んでしまった思考は決して止まらず、どんどん深みにハマっていく。

「やっぱり僕は結局………」

次第に頭が真っ黒に染まっていき、体が震えてくる。

震える手でポーチを開き、常備していた自決用の薬に手を飛ばし――

「――ひゃいっつ!!!」

突然首ものに冷気を感じ、体が跳ね上がる。

咄嗟に後ろを振り返ると、ヘラヘラと笑う言の葉くんが缶ジュースを持っていた。

「流石にこの時期でも、5時間ぶつ通しだと暑いでしょ」

「そ、そうだね………」

そう言って僕の隣に座り、缶ジュースを手渡される。

缶ジュースはキンキンに冷えていて、長時間の運動と行き詰まった思考をクールダウンするにはピッタリだった。

思わぬ気遣いに、渡された缶ジュースを両手で握りしめじっと見つ

める。

「不幸ちゃんは飲まないの？ スポーツドリンクは嫌い？」

「いやっ、あの、全然嫌いって訳ではなくて……あの、あの、その」
いつの間にかちゃん付けになっていた呼び名は、探索の間に慣れてしまった。

さっきまで自害しようとしてました。なんて言えるはずもなく言葉に詰まる。

詰まったことを誤魔化すように、缶ジュースを勢いよく開け、一気に飲み干す。

「んっ……んっ……んっ……ぷはっ！」

「おおっ、いい飲みっぷりだね」

諦めちやダメだ。

言の葉くんはこれだけノーヒントで探し回り続けて全然へこたれていないんだ。

僕も頑張らないと。

一気飲みの反動で息を切らしながら覚悟を決めた僕を、言の葉くんはじつと見つめていた。

「えっと……ありがとうございます。ご馳走様」

「はい、お粗末さまでしたっつと」

ジュースへのお礼を言うと、満足したのか言の葉くんは視線を変えた。

「まあ良かったよ。不幸ちゃんが落ち着いたみたいで」

「えっ！ ああっ、あの……」

まさか自害しようとしていたのを見られていた？

僕がどう誤魔化そうか思考を巡らす様を見て、言の葉くんはまたハラハラ笑う。

「いやさ、搜索中ずっと血眼になって探してたから。気になってね」

「ああ……それは……あの、ごめん」

「謝ることじゃないよ。むしろ助かってる」

自害がバレていた訳ではないことに少し安堵する。

バレていた時、また僕は自分の悩みを人に打ち明けなければいけな

いところだった。

「だけど、捜索中にそんなに必死になっていたなんて、自分じゃ全く気づかなかった。」

「不幸ちゃんは初仕事だから張り切ってるのも分かるけど、少し落ちて着こう。ぶつちやけた話、探偵の仕事なんて、最悪成功しなかったっていいからね」

「えっ……それは、いいの……?」

「いいんだなこれが」

いきなりとんでもないこと言う言の葉くんに驚きを隠せない。

探偵の仕事は、人からの依頼から生まれるもののはず。

それが成功しなくていいなんてありえるのだろうか。

「例えば『迷子になった猫を探して欲しい』って依頼があったとして、探した結果猫が死んでたとする。」

「う、うん」

「それを依頼者に伝えた場合、その依頼は成功か? 失敗か?」

「えっ? えっと……」

突然投げかけられた問題に困惑する。

依頼の内容は猫を見つけること。

死んでいたとしても、消えた猫を見つけることは出来ているんだから……

「成功……だと思う」

「その心は?」

「見つけること自体が依頼であつて、そこに生死は関係ないから……とか……」

僕の答えに言の葉くんは少し目を丸くした後、またすぐヘラヘラ笑い出す。

「不幸ちゃんは結構残酷なんだね」

「えっ……」

全く予想していなかった返答に、つい言葉が漏れる。

僕が残酷……?」

「きつと不幸ちゃんの答えは正解だと思うよ。俺も依頼は成功だと思

う」

言の葉くんはヘラヘラした顔つきから一変し、真面目な顔つきで僕を見る。

「でもそれは探偵のエゴなんだよ」

「エゴ・・・？」

探して欲しいと言われた猫を見つけ、死んでいたことを伝えることが探偵のエゴ。

イマイチ理解が出来ず、反応に困ってしまう。

僕が上手く飲み込めていないことを汲み取ってか、言の葉くんは少し言葉を探しているようだ。

「じゃあ依頼者の目線で考えてみよう」

「う、うん」

「ある日いつの間にか可愛がっていた猫が家から消えていて、自分でいくら探しても見つからない。最終的に頼ったのが、たまたま近くに事務所のあった君の所来た」

そう言つて僕に指を指した。

『『迷い猫を探して欲しい』、依頼者は報酬金を掲示し頼み込む。そして君はもちろん？』

「それを・・・引き受けると思う・・・」

ただの猫探しの依頼。

きつと探偵なら誰しもの事と割り切つて引き受けるだろう。

「で、君はすぐに真実にたどり着く。」

「・・・」

「猫はもう死んでいて処分された後だということにね」

言の葉くんは残っていた缶ジュースを飲み干す。

「ここからが君の選択だよ。不幸ちゃん」

「・・・うん」

「君が『猫は死んでいました』と言えば、きつと依頼は成功だ。涙を流して悲しむ依頼者に対して報酬金を求めるといい」

やっと探偵のエゴだということの意味を理解した。

でもそれは――

「決して間違いではない選択だ。結果がどうであれ報酬金を貰うのは当然だし、探偵としても真実にたどり着くことは最も重要だ」

そう、間違いではない。

だがそれはエゴだ、依頼者の気持ちを一切考えない。

ただ自分の満足の為に、金の為、信念の為に残酷な真実を伝えただけ。

自分が目指していたものの不完全さにゆっくりと俯いてしまう。

真実を暴くことは必ずしも良い結果になる訳じゃない。

なら探偵は必要なんだろうか……。

「じゃあ……僕たちはいつたい……どうすればいいだろう……」

「簡単だよ、不幸ちゃん」

俯いた視線を上げ言の葉くんを見ると、もう真面目な雰囲気は消えていて、またヘラヘラと口角を上げている。

「嘘でもつけばいいじゃないか」

「う、うそ？」

『申し訳ありません、猫は見つかりませんでした。』この一言を伝えるだけでいい」

「それは……」

あつていいことなんですか、と口にしようとしますが、言葉が出ない。

残酷な真実を伝えるくらいなら、甘い嘘をつく。

それが探偵のあるべき姿なんだろうか。

それは救いになるのだろうか……。

「俺が思うに探偵の仕事は、依頼者を納得させることだと思ってる」

言葉を続けながら、言の葉くんは空き缶を放り投げる。

「その為にどんな嘘を吐こうと。探偵として間違っているとしても。」

投げられた空き缶は放物線を描き、公園の隅にあったゴミ箱に綺麗に収まった。

「それだけが俺の探偵だと思ってる」

これが探偵同盟に選ばれた人の考え方。

歳は近いものの、僕とは見えている世界が違いすぎる。

「凄いな……言の葉くんは……」

「凄いのは不幸ちゃんの方じゃないか」

「えっ?」

自己嫌悪から零れた言葉に予想外の返しがきて、困惑する。

これまで周りに迷惑ばかりかけてきた僕のなにが凄いつていうんだ。

「社畜さんから聞いてるよ。殺人事件を解決したんだろう?」

「あれは社畜さんの推理を手助けしただけで・・・」

「才能のある人間にしか、殺人事件の推理の手助けなんて出来ないよ」

僕の言葉を遮るように、言の葉くんは言葉を続けた。

僕の才能なんて、不幸をばら撒くこと以外のなんでもない。

そんな僕に探偵としての才能なんて・・・。

「まあ長くなっちゃったけど、要約すると仕事は気楽にやろうよってこと。今回みたいなのゆる〜い仕事なんかは特にね」

「・・・うん、わかった」

言の葉くんの言葉を受け、かなり落ち着いてきた。

言の葉くんはゆっくり立ち上がり、伸びをする。

時計を見ると、もう20分近く経っていた。

僕も続いて立ち上がる。

制限時間は20時頃まで、それ以上になると暗くなつて搜索はまともに行えないし、見つけたとしても社畜さんに引き渡せなくなる。

急がないと。

力む手からペコツと空き缶の凹む音がした。

「空き缶、捨ててこようか?」

「いいよ、これくらいは自分で」

そう言つてゴミ箱の方に歩きだしたが、さっきの言の葉くんの空き缶投げを思い出す。

これくらいの距離なら・・・

「えいっ!」

勢いよく放り投げた空き缶は大きく膨らんだ放物線を描き、ゴミ箱を通り越して公園の外を歩いていたおばさんの頭に当たった。

「あっ」

「すみません！」

急いでおばさんの元に走る。

当たり所が悪かったのか、おばさんは頭を抱えてしゃがみこんでしまっている。

「大丈夫ですかっ！」

おばさんに駆け寄り、俯いた顔を覗くと、鬼のような形相で僕を見ていた。

「あんたねえ！いい歳して空き缶投げて遊んでんじやないよ！」

「ひいひいひい！」

胸ぐらを掴まれ凄まじいと、思わず情けない声が漏れてしまう。

そんな僕を見かねたのか、言の葉くんが間に入って仲裁に入る。

「まあまあ落ち着いてくださいよ、ご婦人」

「なに？」

おばさんは少し考えたあと、やれやれと言った感じで手を離れた。

「……つたく、今回だけだからね。」

「本当に、ごめんなさい」

しっかりと頭を下げて謝罪する。

他人に不幸が降りかかったことはあったけど、まさか自分でこんなことをするなんて……。

「お心遣い感謝します、ご婦人。お詫びと言ってはなんです、あなたのお悩みを一つだけ解決しますよ」

僕が頭をあげると、言の葉くんは丁寧な立ち振る舞いでおばさんに接していた。

顔つきも口調もまるで別人だ。

「悩み……？今はいいわ、あたし急いでるの」

おばさんは付き合ってもらえないとばかりに振り返り僕らから離れていく。

確かによく分からない男にいきなり悩みを解決してあげると言われても、怪しくて頼れないだろう。

当然の反応だ。

「ウソ、ですね」

言の葉くんは、離れていくおばさんに届くようにか、大きめの声でそういった。

おばさんもいきなりそんな事を言われて驚いたのか、勢いよく振り返る。

「何言ってるんだい？あんだ、人をいきなり嘘吐き呼ばわりして」

「あなた、たいして急いでいないでしょう？」

おばさんは少しイラついているのか口調が荒い。

それに対して言の葉くんは何故か相手を煽るような口調に切り替わっている。

「ほんとに急いでいる人間は、缶をぶつけられた程度じゃわざわざ絡んでこないでしょ」

「はあ？」

「やめなよ言の葉くん……」

あまりのケンカ腰について言の葉くんの袖をつかんで制止しようとするが、言の葉くんは止まらない。

おばさんも明らかに怒っている。

ものすごい剣幕で近づいてくる。

「あんだ何なのよ。ツレが空き缶ぶつけといて絡んでくるって、どういう神経してるわけ？」

「俺は、悩みを解決しますよって言ってるんですよ」

こんな状況で何言ってるんだ。

おばさんが目の前まで近づいてくる。

おばさんは今にもビンタでも繰り出してきそうだ。

「あんたみたいなガキにね、相談するような悩みなんてないよー！」

おばさんは手を大きく振りかぶり、それが言の葉くんの顔面に振り

下ろされ――

「――猫、探してるんですよ？」

「なっ!？」

「えっ?？」

おばさんの手が寸前で止まる。

おばさんは凶星だったのか、明らかに動揺している。

猫を探しているなんて、そんな素振り全くなかったの、なんでわかったんだろう。

「あんた、なんでわかったの……」

「自分、実は探偵をしております、人の悩みに敏感なんですよ」

言の葉くんは「こそぞばかりに名刺を差し出す。

「服に付着した猫の毛、そして公園の前を通りすぎる時、あなたは異様に周囲を見渡していた」

「えっ、そんなところ……」

そんなところを観察していたなんて、いつの間に……。

服に猫の毛と言われ、おばさんは自分の服についての猫の毛を確認する。

僕も注意して見てみると、言われた通り少量ではあるが猫の毛が見える。

「でもあんた、それだけじゃ猫探してるなんてわからないじゃない」

「そうでもないんですよ、ご婦人」

いつの間にか言の葉くんは丁寧な口調に戻っていた。

「あなたみたいなマダムが、バックも持たずに何かを探しているとなれば、だいたい当たりはついてきますよ」

「……あんた、見かけによらず意外とやるのね」

言の葉くんの推理に納得したのか、おばさんの怒りは引っ込んでいた。

おばさんは携帯を取り出し、画面をこちらに向けた。

「はい、これがあたしんちの猫。シェリーっていうの」

「どうも」

言の葉くんは携帯の画面をじっと見つめる。

画面には茶色の毛並みの猫が愛らしく映っていた。

「オッドアイなんて珍しいですねえ」

「あらわかるう?」

言われてみると、確かに猫の両目の色が違う。

右目が青く、左目が少し茶色い。

猫を褒められ、あからさまに機嫌をよくしたおばさんは写真をスク

ロールした。

「オッドアイってだけでも珍しいのに、白猫でもないし、いいもの見た気分ですよ」

「そうそう、白猫じゃないオッドアイなんて滅多に見られないんだから」

言の葉くんは僕の予想以上に猫の話に夢中だ。

そこからはおばさんのかわいい自慢が暫く続いた。

そういえば、言の葉くんはなんでわざわざ見ず知らずの人の猫まで探そうとしているんだろうか。

今のところ三匹の迷い猫について全く情報を取れていない以上、さらに仕事を増やすなんて無茶じゃないのか。

時計は14時40分を超えようとしていた。

タイムリミットは刻一刻と迫っていた。

「じゃあ、何かわかり次第連絡させてもらいます」

「わざわざありがとうね。意外とあたし、イライラしていたみたいで帰って少し頭を冷やすわ」

言の葉くんとおばさんの話は終わったらしい。

おばさんは頭をさすりながら、こちらに向き直る。

「あなたも、ほんとにごめんね。いきなり胸ぐらなんか掴んじやって…」

「いえいえ、きっかけを作ってしまったのは僕なので…。ごめんなさい」

お互い頭を下げ、最終的におばさんとは円満に解散となった。



【1月 21日 15時】

「さて、ここからどうしようか」

「どうしましょうかね……」

あの後、言の葉くんと共に駅前まで戻ってきた。

日は少し沈み始め、人通りも朝と比べればかなり落ち着いている。

朝ほど気分が悪くなることもない。

搜索については、目ぼしい場所は既に調べ終わっている、駅前から仕切り直しといったところだろうか。

でも正直八方塞がり感は否めない。

あれだけ周辺を搜索しても猫一匹見つからなかったんだ。

搜索範囲をさらに広げるほども時間もないし、目ぼしい場所もあまり見当たらない。

——猫一匹見つかっていない……？

「そういえば言の葉くん、今日一匹も猫見てないね」

「確かに、ここまで見ないのは珍しいな。運がいいのか悪いのか……」

「不自然じゃない？」

「まあ不自然っちゃ不自然だね」

言の葉くんはうんうんと頷きながら、携帯を眺めている。

言の葉くんの反応は適当だ。

理由もわかっている。

不自然だとしても、『だからどうした』で終わる話なのだ。

それが手掛かりになるわけではないのは、言の葉くんも気づいているんだろう。

でも、ここで立ち止まるわけにはいかない。

何もせず考えるより、少しでも行動したいところだ。

「僕、やっぱりまたいろいろなどこ見てくるよ！」

勢いよく立ち上がり、声を上げる。

隣の言の葉くんはそんな僕をヘラヘラ笑いながら見ている。

「不幸ちゃん、気楽に、ね？」

「大丈夫です……すっかり覚えてますよ……」

「じゃあ、安心だ。行ってらっしゃい」

言の葉くんに見送られ、歩き出す。

気楽に、落ち着いて、仕事をする。

公園でしていた話を思い出す。

大丈夫だ、呼吸も荒くない。落ち着いてる。

まずは携帯の地図で、また大体の目星をつける。

さつきは含めなかった細かい部分も検討してみよう。

「不幸ちゃん前見て！」

「えっ？」

後ろから言の葉くんの声が聞こえて、振り返った瞬間

——どんっ

背中に強い衝撃を受けて転んでしまう。

どうやら携帯を見て前方不注意だったらしい。

言の葉くんに声をかけてもらえなければ、真正面からぶつかっていただろう。

「うう…いたた…」

「あっ…すみません！」

ぶつかった相手は僕よりも少し若いくらいの少年だった。

髪の毛は伸びきっていて、長袖のセーターは緩み切っていてだぼだぼだ。

少年に手を貸してもらい立ち上がる。

少年はペットを入れる用の持ち運びできるケージを持っていた。

「あの…ほんとにすみません…」

「いや、僕の方こそ。不注意だったよ…」

「あの…じゃあ僕急いなので…」

少年は気まずそうに逃げていこうとするが——

「——待ってくれ」

いつの間にか僕の後ろに立っていた言の葉くんが引き留める。

少年は足を止めるが振り返らない。

「急いでいるので…」

「道を聞きたいんだよ、すぐ終わるからさ」

言の葉くんはゆっくり少年に近づいていく。

「この場所への行き方を教えて欲しくてさ」

「…は？」

言の葉くんは少年の肩に腕を回し、携帯を見せる。

少年はおびえてしまっている。

「ここなんだけど…あれ、そのケージって、ペットでも飼ってるの

？」

「えっ!?……あの、はい飼ってます」

「そうなんだ。で、ここなんだけど」

「そこだったら——」

言の葉くんは何かするわけではなく、少年からただ道を教えて貰っているだけだ。

でもなんでわざわざ道を聞くんだろう。

さっきまで携帯で調べていた場所への道がわからなかったのだろうか。

「ありがとう助かったよ。引き留めてごめんね」

「いえ…全然、そんな…それじゃ行きますね」

少年は少し駆け足で行ってしまった。

言の葉くんは満足そうに携帯をしまい、探偵デバイスを取り出した。

「言の葉くん、何か手がかりがあったの？」

「ああ不幸ちゃん、お手柄だよ」

いきなりお手柄と言われ困惑する。

僕は何もしてないけど……。

「手がかりのありそうな場所でも聞けた？」

「いや、今回の——」

言の葉くんは探偵デバイスをしまい、僕に視線を向ける。

「——事件の真相と犯人が分かった」

僕の気づかぬ間に事件は解決に進んでいた。

第3話 被虐的であろうと、救いへ。

【1月21日 15時】

「事件の真相と犯人がわかったって……突然そんな……」
さつきまでは取り付く島もないような状況だったのに、いきなり真相と犯人がわかったなんて……。

って、事件？犯人って——

「——今回の依頼は猫の捜索じゃないんですか!？」

「依頼上ではね。でも真実は、誰かが意図的に起こした明確な事件だった」

ただの猫探しのはずが、状況が変わる。

誰かが意図的に猫をいなくしているってことは、それは……。
「猫は誘拐されてるってことですか……?」

「まあそうなるだろうね。それより急ごう、あまりに距離が離れると追いつけなくなる」

僕の返事をまたず、言の葉くんは携帯を見ながら早歩きで動き出す。

それに離されないよう、しっかりとついていく。

「言の葉くん、説明してよ。なんでいきなり犯人がわかったの?」

「あぁごめんね、実は——」

「——今回の事件は初めから、真相の目星がついていたんだ」

「えっ……?」

あまりの事実言葉が出ない。

最初から真相が見えていたなんて、そんなのおかしいじゃないか。

真相が見えていたなら、5時間も意味のない捜索なんかしなくてよかつたんじゃ……。

「だから、今回は俺の推理を確かなモノにするために、初めに時間割いたんだ」

「あの探索の時間ですか?」

「そう。あの探索はパツと見、なんの情報も得られなかった無駄な時間だったけど、俺の推理がもし間違っただけならば、探索の時に“何も

見つからない」という結果が見つかると思ってた」

「何も見つからない」が見つかるって……」

『猫が1匹も見つからなかった』、という不自然さを確かなモノにするために、あんな時間を取ったって言うのか……」

「社畜さんが迷い猫の飼い主達の住所を伝えなかったのは、きっと意味が無いからだ。」

「意味って…何の意味が…?」

「どこかを搜索する意味が、だよ」

搜索する意味がないことを伝えるためって、なんでそんな……。直接そのことを伝えてくれればいいのに……。

社畜さんらしからぬ回りくどさに困惑してしまう。

そんな僕の心を見透かすかのように、言の葉くんは振り返って微笑んだ。

「安心しなよ。これはきつと社畜さんからのテストみたいなものだったんだ」

「試練ですか……?」

「そ、俺たちが探偵同盟としてやっていけるかのテスト。馬鹿正直に探索し続けるような探偵は探偵同盟にいらないだろうからね」

「そんなっ……」

テストなんて……やっぱり探偵同盟に入るのは厳しいのか…。

社畜さんに誘われて覚悟を決めたものの、こんなテストにも気づかないなんて。

僕だけじゃ、がむしやらに探索を続けて時間切れになっていただろう。

「でも、今回は不幸ちゃんのおかげでサクッと終わりそうで良かったよ」

「僕のおかげで……?」

今日の仕事で、僕が活躍したところなんてあったらどうか……。

ほとんど言の葉くん一人で真相まで辿りついてしまった気がする。

「今回の事件、真相への決め手と犯人は、君が連れてきてくれたんだよ」

「えっ……」

「まず一つ目として、猫がいなくなっちゃったおばさん」

僕が間違えて缶をぶつけてしまったおばさんのことだろうか。そういつて言の葉くんは僕に携帯の画面を向ける。

画面には茶色の毛並みの猫が映っていた。

この猫とおばさんが真相への決め手……？

「正直、猫が誘拐されていたってことはわかってても、動機も犯人もわからなかった」

言の葉くんは携帯を自分の手元に戻し、またこちらに向ける。

「でもこれでハッキリした」

「これって——」

画面に映っているのは、最近流行りのフリマアプリだ。

しかも、その内容にはさつき見た茶色の毛並みの猫が映っていた。

「——あのおばさんの猫じゃないですかっ！」

「そう、茶色の毛並み。そして青と茶色のオッドアイ。間違いなくさつきの猫だ」

「……じゃあその猫は今フリーマーケットに出されているんですか？」

「そういうこと」

そういうと言の葉くんは携帯をしまった。

「じゃあ、犯人は猫を盗んで、それを売ろうとしてるってことですか？」

「多分そうだね。このオッドアイの猫も、今日の昼に売りに出されたみたいだし、アカウント自体も作られたばかりだ」

公園から駅までずっと携帯を見ていたのは、このアカウントを探していたのか……

「じゃあ、僕たちが探している三匹もまだ……」

「まだ誰かに買われてはいないね」

「じゃあそのアカウントの人間を突き止めれば、犯人が——」

犯人が分かるんじゃないか、と言おうとしたところで言葉に詰まる。

「そうだ、そんな簡単な話じゃない。」

「わかるだろうね。でもそれじゃあ意味がない」

「そうだ、僕らには重要な問題が残ってる……。」

「アカウントの人間を特定するにしても時間がかかる以上——」

「——制限時間に間に合わない……。」

「そうだね、俺達には制限時間がしつかりと決められてる」

「制限時間は20時頃まで、あと四時間と少し。」

「その間にアカウントが分かっているととしても、その中の人間を探し出すなんてかなりの時間がかかるだろう。」

「だから俺はもう、このアカウントを社畜さんに送って、それで終わりでいいかなって思ってただけど、そこで君の連れてきた二つ目の手がかりだ」

「それって……」

「二つ目は流石の僕でもわかる。」

「言の葉くんがああタイミングで犯人が分かったってことは、手がかりは——」

「——あの少年、ですよ」

「大正解、彼がこの事件の犯人だよ」

「正直わかつてはいたが、理解ができない。」

「ここまで話を聞いても、あの少年を犯人とする理由が見えてこないのだ。」

「ちなみに……なんであの子が犯人ってわかったんですか？」

「理由は結構あるけど……まあまだ時間もあるだろうし、一個ずついこうか」

「そういつて言の葉くんは少し歩く速度を落とす。」

「まずあの子の特徴について」

「言の葉くんはまた僕に携帯を向ける。」

「携帯にはさっきの少年が全身映った写真が残っている。」

「まず、お婆さんの時もそうだったけど、服に猫の毛がついてた。しかも大量に」

「ほんとだ……。しかも色んな色の毛がついてる……。」

写真の少年の着ていたセーターにはもちろん、ジーンにも毛がついていた。

白い毛や茶色い毛、よく見たら黒い毛まで見える。

ぶつかった時は気づかなかったけど、意識して見てみるとここまですっかり見えるのか。

「誘拐と思つた時からずっと、周囲の人には目を配ってきたけど、猫の毛がついていたのはおばさんとあの子だけだ」

「ずっとですか!?!」

誘拐と思つた時からって、社畜さんの依頼を確認した朝からってことじゃないか……。

「そしてこの写真じゃ判断しづらいけど、腕のところに動物の引っかき傷みたいなのがかなりあった」

言の葉くんは写真をズームし、袖から出てる手首を拡大すると、少しだけ傷のようなものが見える。

「こんな傷、いつの間に見つけたんですか……?」

「あの子が転んだ君に手を貸した時だね。あとは道を聞いた時に少し確認したかな」

僕が転んだとき、言の葉くんとはかなり距離があつたと思うけど、凄い観察眼だな……。

手を貸してもらつた僕ですら気づかなかつた……。

でも、あの子は確か——

「——あの子はペット飼っているって言ってますでした……?」

あの子は、言の葉くんの『ペットを飼っているか?』という質問に、飼っていると答えていた。

「だったら、腕に引っかき傷があつても、服に毛がついても不自然ではないんじゃない?」

「ああ、あれ……ウソ」だよ」

「えっ……!?!」

さらりと言つた言葉に驚きを隠せない。

おばさんの時もそうだったが、なんでそんなにウソと断言できるんだろう。

「ケージに入ってた何かも、多分人のものを盗んできたんだろうね」
「今回はなんでウソってわかったんですか？」

ウソなんてそんな簡単に見分けられるものじゃない。

おばさんの時も正直、なんであそこまで自信満々に突っかかるのかわからなかった。

言の葉くんはどうして、そこまでウソに敏感なんだろう……。

「まあ、わざわざ言うことじゃないと思ってるから言わなかったんだけど……」

言の葉くんは珍しく言葉を濁し、改まってこちらを向いた。

「不幸ちゃんと同じで俺も、特別な体質を抱えてるんだよ」

「えっ……!?!」

予想外の告白に動揺する。

特別な体質って…僕の場合は周囲に不幸を振りまく体質だけど、そういう類だろうか……。

「それは人の言葉が『ウソ』かわかること、それだけ」

「それだけって……」

充分すごい体質じゃないか……。

感心している僕とは裏腹に、言の葉くんの表情は晴れない。

「僕はすごい体質だと思うよ……!僕なんかの不幸を振りまく体質なんかと比べたら全然……」

「ほんとにそう思うかい？」

言の葉くんはヘラヘラ笑いだす。

「君は自分のウソが全部バレるような相手と関わりたいと思うかい？」

「えっ……?」

ここで初めて、自分の発言がいかに軽率だったか思い直す。

僕と同じで、特別な体質を持つている以上、その人なりの悩みがあるのに……。

軽々しくすごい体質と言ってしまったことを後悔する。

「まあ人間ウソついてなんぼさ。ウソすらつけない相手にかかわりたいと思う人間は少ないだろう」

そういう言の葉くんの目は、少し悲しそうに見えた……。

「だから、誰からも避けられるようなこんな体質でも、人の役に立てればと思つてこの仕事を始めたんだ」

「……僕も同じです」

不幸をばらまく人間も、ウソが分かつてしまふ人間も、人から避けられるという意味では同じだ。

そんな二人が少しでも人の役に立つために、探偵を志すなんて……。

思いがけない共通点にシンパシーを感じる。

「さあ、さうこういつている間に目的地だよ」

言の葉くんについていった先は商店街の路地裏の更に奥。

「ここ……ですか……？」

「あの子に取り付けたGPSを見るに、ここの奥で間違いないね」

「奥つて言つても……」

目の前にはフェンスしかない。

これ乗り越えれば、犯人と……。

人生二回目の犯人との対面に、自然と息が上がっていた。



【1月21日 16時】

日も沈み始め、もうすつかり夕方だ。

廃墟ビルの駐車場、やっぱりここを拠点にしてよかつた。

まず人は寄り付かないし、外に出る時はフェンスの方から出れば怪しまれる心配はない。

「これだけいれば……きつと……」

車の後部座席に入った大量のケージを見て眩く。

1匹最低10万と見積もつても、100万は確実。

今日でこんな生活も終わる……。

野良猫を探して駆けずり回つたり、他人の家の猫を盗んだりすることもなくなる。

「兄ちゃん……！戻ったよ……」

振り返ると、ボサボサの髪を揺らしながら弟の正人が走ってくる。その手にはしつかりとケージが握られている。

「おかえり正人、今回も無事でなによりだ」

「うん……とりあえず、言われてた分はこれで最後だと思う……」
ケージを受け取り、猫を確認する。

白い毛並みのオッドアイ、目的の猫を確認しリストに丸をつける。ここら辺の住民でオッドアイの猫を飼ってる家のリストだ。

「でかした。じゃあ作業が終わり次第帰ろう」
猫をフリマアプリに流す。

この作業を行わない限り、目的が達成されることはない。
急いで作業をしようとしたところ、裾を引っ張られる。

「兄ちゃん……」

「どうした正人」

振り返ると、正人が不安そうな目でこちら見ていた。

「これで、本当にお母さんを助けられるの……?」

正人は絞り出すような声で言った。

母さんを助ける、その言葉を聞いただけで体が震えてしまう。

俺たちの母さんは今病気で入院している。

その手術費用は、俺たちの想像を超えるものだった。

貯金も大してなく、借金もそう簡単に出来やしない。

俺たちに残されていたのは、こんなクズみたいな方法しか無かった。

「ああ、絶対に助けられるさ」

俺たちの行動は間違っていない。

自分に思い込ませるように、正人を不安にさせないように、そう告げた。

「だから後は俺に任せて休んどきな」

そう言って正人の肩を叩く。

俺は今、兄として優しく微笑むことが出来ているだろうか。

弟が産まれた時を境に両親は離婚し、病弱な母さん1人で俺たち2

人を育て上げてくれた。

恵まれた環境であったとは言えないけど、俺は幸せだった。

だからこれまでの恩返しとして、どれだけ家族が不幸に見合われようが、どれだけ自分がクズになろうが、母さんだけは・・・正人だけは幸せにしてみせる・・・。

「・・・・・・・・うん！」

正人は純粹な瞳で俺を見ていた。

何も知らない正人の瞳に見つめられ、心が痛くなる。

正人は猫だらけの後部座席に乗り込む。

今日も朝からずっと動きっぱなしだったんだ、すっかり休んでくれ。

「ふう・・・・・・・・俺の仕事はこつだからかな・・・・・・・・」

そう、ここからが本番。

フリマアプリからくる取引の為に、明日から日本中を走り回ることになるだろう。

ちようどついさつきも、取引の連絡がきたところだった。

そのための準備と、取引の確認を欠かさずしないと――

「――すいませえん、道を聞きたいんですけどお〜」
すつとぼけた声が、無音だった駐車場に鳴り響いた。



「すいませえん、道を聞きたいんですけどお〜」

言の葉くんのふざけた声が駐車場に響く。

言の葉くんの言う通りなら、この人が今回の事件の犯人・・・・・・・・。

「・・・・・・・・何の用だ」

犯人と思われる男は、こちらを睨みつけている。
当たり前だ。

裏路地のフェンスからの隠し通路からここにきたことはバレてる以上、僕たちを怪しむのは当然だろう。

だが、言の葉くんは飄々とした態度を崩さない。

「道を聞きたいんですよ、ちょっと探し物をしてまして」

言いながら言の葉くんは近づいていくが――

「――止まれ！」

男は声を張り上げる。

思わず体が萎縮してしまう。

流石の言の葉くんも足を止めた。

「それ以上近づくな。どうせ何か根拠があつてここにきたんだろう」

そう言つて男はワゴン車の方に向かい、何かを取り出した。

「ひいー！」

「俺はこんなところで終わる訳にはいかないのさ」

取り出されたナイフをこちらに向けられ咄嗟に悲鳴を上げてしま
う。

言の葉くんはナイフを見てもまだ、ヘラヘラと笑っている。

「いいね。まだ何も言つてないのに、そこまで覚悟を固められるなん
て」

「黙れ。ここはほとんど人が来ない無法地帯だ。――だから」

男は喋りながら言の葉くんに接近し、ナイフを振り下ろした。

が、言の葉くんは腕を掴み、ナイフを受け止めた。

「人が死のうが、関係ねえ」

男は腕を振り払い、またナイフを振り回すが、言の葉くんは1歩ず
つ下がりがら器用に避けていく。

「証拠もなし、言質もなし、ただ居場所がバレただけでここまでやるな
んて――」

「――黙つてろ」

言の葉くんの軽口も、大きく振り払われたナイフにかき消される。

「ほんとに覚悟を決めてるんだね」

「さつきから覚悟覚悟つて、何言つてんだお前」

言の葉くんは少し肩をすくめる。

「悪人になる覚悟だよ……」

「……」

言の葉くんの言葉に、男の表情が歪む。

ずっと無表情を貫いていたのに、途端に苦虫を噛み潰したような表情だ。

どれだけ覚悟を決めていても、改めて言葉にされると意識してしまう。

僕も言の葉くんの言葉の意味をゆつくりと理解した。

僕らはまだ証拠も、言質もまともにならない。

だから適当に言い逃れてしまえば済むのに……。

「まあまだ君は——」

男が少し油断した隙に、言の葉くんが一気に接近する。

「——なっ!?!」

男は咄嗟にナイフを振り下ろすが、言の葉くんはそれを読んでいたのか、流れるように手首を掴んだ瞬間——

「よっ」と

——男は一回転し、地面に叩きつけられた。

あまりの鮮やかさに目を奪われる。

「ぐはっ……」

叩きつけられた衝撃で、ナイフが僕の足元まで転がってきた。

それはゆつくりと拾い上げる。

「まだ、殺人犯になる覚悟まではないみたいだね」

言の葉くんはニタリと笑みを浮かべ、地面に這いつくばる男を見下ろしていた。

その姿は探偵というより、どこか悪人じみっていて恐ろしく見えた。

「さ、わざわざ推理を説明するのも面倒だから自白してくれよ。どうせあの車に猫が入ってんだろ?」

「くっ……」

言の葉くんは地面を這う男の目の前にしゃがみこみ、視線を合わせる。

男は歯を食いしばり視線を合わせようとしなない。

「不幸ちゃん、車の中」

「えっ……ああ……、わかった」

突然声をかけられ少し驚いたが、言の葉くんが車の方に指を指した

ことで車の中を調べて欲しいということだと理解する。

僕が歩き始めると、地面に這った男はこちらに首を向けたが、特に何かを言うわけでもなく、じつとこちらを見つめていた。

車のドアノブに手をかけ、ゆっくりと開けると――

「――うわあああああ!!!」

「えっ……」

ドアノブの奥、車の中から駅前で見えた少年が飛び出し僕に体当たりを食らわす。

だが、その衝撃とは別に、僕の左腕に鋭い痛みが走る。

「不幸ちゃん!」

「正人!何をやってるんだ!」

「ああ…あ、ああ……」

言の葉くんの声だけが耳の奥で鳴り響く。

死ぬことを本気で考えていたあの頃、慣れ親しんでいた痛みの方に目をやると、そこにはカッターナイフが深々と突き刺さっていた。

痛い痛い痛い

熱い熱い熱い

久しく感じていなかった苦痛に思わずしゃがみ込んでしまう。

「はあっ…はあっ…はあっ…はあっ…はあっ…」

短く呼吸をして息を整えようとするが、視界に入る自分の血の色が僕の呼吸を荒くする。

「落ち着け不幸ちゃん、落ち着け」

視界の中に言の葉くんの顔が映り込む。

視界から血の色が消え、少し呼吸が落ち着いてくる。

「大丈夫だ、不幸ちゃん。君は死なない。大丈夫…大丈夫…」

「はい……はい……」

言の葉くんに背中をさすられながら、うんうんと頷く。

「カッターナイフが刺さったままじゃ危険だ」

言の葉くんが僕の左の前腕部分に突き刺さったカッターナイフに触れるが、その手を止める。

何かの記事で見たんだ、無暗に突き刺さった刃物を抜くと、逆に出

血多量になってしまおうって……。

「大丈夫、この位置なら抜いても問題ないよ」

そういつて、言の葉くんは僕の左腕を抑えながらカッターナイフを握る。

「いくよ……」

3…2…1…

「ううっ……」

カッターナイフが勢いよく引き抜かれると共に、肉の中から異物が抜ける感覚と新しい痛みが訪れ、悶えてしまう。

言の葉くんはカッターナイフを引き抜くと、すぐに傷口の少し上辺りをタオルできつく縛りつける。

「とりあえず、応急処置。あとは間に合わせだけど、これ」

そういつて手渡されたのは、大きめの絆創膏だった。

「それで傷口さえ塞げば、止血にはなると思う」

「あ……ありがとう……」

ようやく口から絞り出た感謝の言葉。

僕の言葉をきいて安心したのか、言の葉くんは立ち上がり、さつきまで地面を這っていた男と僕を刺した少年の方に向き直る。

「そっちの少年の方が、よっほど殺人犯になる覚悟ができてるみたいだな」

言の葉くんの表情はもうヘラヘラしたものではなく、真剣だ。

「待ってくれ……正人は別に、わざと刺したわけじゃないんだ……」

男は両手をあげて弁明する。

「……そう！事故なんだよ！悪いのは俺だ！俺なんだよ！」

男は少年をかばうように一歩前が出る。

「猫の件もそうさ！犯人は全部俺だ！正人はただ俺に脅されて協力しただけで……」

男は今にも消え入りそうな声で言葉を続ける。

「自白すればいいのか!?なんだって言ってやるよ！だから——」

男の言葉が途中で止まる。

よく見ると、男の後ろに立っていた少年が裾を引っ張っていた。

「ごめん、兄ちゃん……、僕……兄ちゃんを助けたくて……」
「ああ、わかっている……わかっているよ……」

男はしゃがみ込み、少年に視線を合わせ、今にも泣きだしそうな少年を慰める。

「言っただろう？あとは兄ちゃんに任せとけばいいから……母さんもお前も、絶対に幸せにして見せるから……」

男はひとしきり少年を撫でた後、立ち上がる。

「さあ、俺を捕まえてくれ。もう言い逃れしたり暴れたりしないよ……」

男は観念したのか、脱力して両手をこちらに突き出す。

「お前の言う『母さん』が、今回の犯行の動機か？」

言の葉くんの問いかけに、男はゆっくり首を縦に振った。

「ああ、そうさ。俺は母さんの病気の治療費を稼ぐために、猫の窃盗なんて狡い真似してたのさ」

男は自嘲気味に笑う。

「もちろん真つ当な稼ぎもしてた。でも、死にもの狂いでバイトしようが、とても間に合う額じゃなかったのさ。最初は物心でき、友人がフリマアプリで古本売ってんのが見て思いついたんだ。」

男はゆっくりと車の方を見た。

「野良猫なんかを売っちゃえば、誰にも迷惑かけずに稼げるんじゃないかなって……」

それが今回の事件の始まりか。

「でも正直、野良猫みたいなまともに管理されてない猫の買い手があつたのは最初だけだった。」

一瞬で数十万手に入った実感と共に、次はなにを売ろうかってことだけを考えていたさ」

「そこで、希少価値の高いオッドアイに目を付けた」

言の葉くんの言葉に、男は頷いた。

「そう、一匹目のオッドアイは野良だった。あれは幸運だったな……」

あのオッドアイの猫が売れてからだ。猫を盗み始めたのは……」

「オッドアイなんてそうそういるもんじゃないもんな」

「ああ、だからSNSでオッドアイの猫を飼ってる家特定して盗んで回ってたってわけだ」

男は車に指をさした。

「安心してくれ。盗んだ猫はまだ一匹も売れちゃいない。全部ケージの中に入れてある」

「わかった。じゃあ——」

「——待って！」

言の葉くんの言葉を遮って、声を荒げる。

大声を出した反動で傷が痛む。

この事件はおかしい……。

「まだ何も売れてないんでしょ？じゃあ、別にわざわざ警察に突き出さなくたって……」

今回はまだ、猫がいなくなったただで事件は終わってる。

「僕たちの依頼は、『猫を探すこと』だったじゃないか。じゃあ、猫は見つかりましたってことにすれば……」

公園で言の葉くんとした話を思い出す。

猫が盗まれてたなんて、伝えなければいけないだけの話じゃないか。

「言の葉くん言ってたよね…依頼者が納得さえするならウソだつてつくって……」

「ああ、いったね…」

「じゃあ、なおさら——」

「——母親を救うためだつていうのがウソだとしてもかい？」

言の葉くんの言葉に心臓が跳ね上がる。

ウソ……？

ウソなのか？

咄嗟に男の方を見る。

「ウソじゃない！俺は母さんを救うために……！」

「この場で君の言葉は意味を持たないよ」

男の言葉を、言の葉くんはあっさり切捨て捨てる。

僕は言の葉くんの体質を知ってる……。

「不幸ちゃん、君が判断するんだ。ウソの可能性を含めてね」

「僕が……」

言の葉くんは僕の目をじっと見つめる。その目を見てると、心の奥まで見透かされているような気分になる。

「君には才能があるんだよ。だから君が決めるんだ。この事件が、ウソに塗り固められていいのか。

適当な言葉で、虚言で済ませてしまっているのか、君が選ぶんだ」男は犯罪者になる覚悟をしていた。

少年は僕を刺した。

男は本気で少年をかばった。

今回の事件で起きたあらゆる情報が頭の中を駆け巡る。

「僕は——」

ああ、答えはとうに決まっていた。

僕は……。

「——僕はウソを選びます」

……報われない人々の救いになるんだ。



【1月21日 19時】

日もかなり沈み、辺りは暗くなり始めている。

廃墟ビルの駐車場にはワゴン車と軽自動車が止まっている。

「じゃあ今回の一件は、ここにいる小里くんが街中で見つけた猫を匿っていたってことでいいんだね」

「はい、それで合ってます」

依頼達成の連絡を受けてきた社畜さんに、言の葉くんはさらりとウソをつく。

見てるこっちがドキドキしてしまう。

今回の事件は、犯人だった男、小里さんとその弟、正人君。

そして僕と言の葉くんの四人で口裏を合わせて、事件の内容を偽造

することに決まった。

内容は、小里さんと正人君がたまたま名札がついていた猫を見つけ、飼い主が見つかるまで代わりに飼っていた、ということに決まった。

野良猫だった猫は全部逃がし、盗んだ猫だけ残しておいた。

「不幸ちゃんのおかげで何とか見つけることができましたよ」

「そうか。それはよかった…。」

社畜さんは猫を一匹ずつ確認していく。

「はい、きつちり三匹。間違いなく確認したよ」

「ありがとうございます」

小里さんが社畜さんに頭を下げる。

「いえいえ。こちらこそ、今回はご協力ありがとうございます」

社畜さんも丁寧頭を下げる。

「じゃあ、僕は早速だけどこの猫三匹を届けてくるから…あとは任せたよ」

「この時間からですか!?!」

「ハハッ」

社畜探偵という名前は伊達ではないらしく、社畜さんは隈のびっしりついた眼を細めて軽く笑うだけだった。

「んじゃあ社畜さん、こいつも」

「えっ?」

言の葉くんが社畜さんにケージを手渡す。

「えっと、言の葉くん…この猫は…。」

「俺が個人的に請け負ったものなんですけど、俺車ないんで、お願いします」

「ええ…」

言の葉くんは軽くお願いするが、社畜さんは仕事が増えてがつくりとへこんでしまった。

「じゃあホントに僕はもう行くから、何かあったら言うんだよ。」

「了解です」

「わかりました…」

社畜さんは車に乗り込み、窓から少し顔を出す。

「言い忘れてた。今回の依頼は無事達成だ。お疲れ様二人とも」

それだけを言い残し、社畜さんは車を動かし去ってしまった。

「行っちゃったね……」

「ま、案外あつけなかったね」

確かに想像以上にあつさり終わってしまったって拍子抜けといった感じだ。

ウソなんてつこうものなら、即疑いの目を向けられると思つてたのに。

「まあ、ウソも方便つてね。堂々としてさえいれば疑われることはないだろう。不幸ちゃんは特にね」

「ぼつ、僕!?!:..:そうかな…?」

「君はウソをつくようなタイプには見えないから、ウソを上手く使えるようになれば化けると思うよ」

言の葉くんの軽口に、思わず僕も口元がにやけてしまう。

「あの…」

「ん?」

声をかけられ後ろを見ると、小里さんと正人君が申し訳なさそうに立っていた。

「俺たちももう帰りますね…」

「ああ、好きにしま。今日はもう解散だ」

そういうと、二人はそそくさと車に乗り込んでいく。

車にエンジンがかかり、今にも動き出しそうだったその時、言の葉くんが車の方に向かう。

「おーい、これ」

車の窓をノックし、小里さんに何か紙のようなものを渡している。

エンジンの音にかき消されて、声は聞こえない。

数十秒もしないうちに車は動き出し、駐車場から姿を消した。

「行っちゃったね……」

「ああ、俺たちも帰ろうか…」

完全に無人になった駐車場に別れを告げ、僕らも駅前に向かう。

「不幸ちゃんはさ、なんでウソを選んだの？」

「え？」

突然投げかけられた質問に、つい生返事をしてしまう。

「君は腕を刺された直後だ。感情的になっても文句の言われない状況で、なんで君はわざわざ彼らを救うような選択をとったんだい？」

「それは……」

上手く言葉が出てこない。

あの時はあまりに突然だったから、勢いそのまま選択してしまった気がする。

「えっと……あの人たちが僕に似てる気がして……」

自分の選択の理由を後付けしていくような言葉をつけ足していく。

「人生どうしようもなくなつて……それでもあきらめる勇気もなくて……」

一つ一つ言葉を吟味して、口から出す。

「だから、悪いことつてわかつてても手を出したり……無理やりにも現状を変えようとした……」

そう、僕の人生も、最初から終わっていた。

家族は息絶え、周りの人間を片っ端から不幸にして、でも死ぬことはできなくて……。

そして今、探偵になつて全てを変えようとしている……。

「そんな彼らを、どうか救いたかつたんです」

そう、僕は救いになりたかつた。

今度は勢いじゃなく、確かな確信をもつて答えた。

「ぶっ……アツハツハツハ！」

突然言の葉くんが笑い出す。

僕はそんなに恥ずかしいことを言つただろうか。

「ははは……、君はなんていうか……本当にすごいね……」

言の葉くんは笑み浮かべながら言葉を続ける。

「君は誰から虐げられても、傷を負つても、報われない誰かの救いになる為に犠牲になるんだろうね」

そう言つて、言の葉くんはこちらを見つめた。

その顔はいつものヘラヘラした様子ではなく、優しい笑みを浮かべていた。

「これからは不幸探偵じゃなくて、『被虐探偵』って呼ぶことにするよ」
『被虐探偵』……」

そういつて言の葉くんはまた、前を向いて歩き始めた。

これが、僕の『被虐探偵』としての始まり。

誰から虐げられても。

傷を負っても。

報われない誰かの救いになる。

僕の探偵としての信条が決まった日。

僕の不幸とも…名探偵体質とも…死ねないこととも向き合って…
ウソをつけてでも…この信条を守って見せる…!

【探偵ならば言葉を紡げ —オッドアイキヤット連続消失事件—】
く完く